

●巻頭インタビュー	2
●そこが知りたい! くらしの金融知識 初心者のための インターネットバンキング	6
●連載エッセイ —くらしの中の金融経済学— 〈第8回〉対岸の火事?	11
●くらしを気持ちよく 新生活 衣服のマル秘 お手入れ術	14
●知るぼると最前線 作文・小論文コンクールを実施	16
●金融教育の現場レポート 養護学校高等部における 金融教育	18
●金融広報だより 〈特別寄稿〉 障がい者に対する金融教育	22
●知るぼるとラウンジ 都道府県金融広報委員会 事務局員の活動紹介 金融広報アドバイザーの誌上公開講座	23
●あたらしい歳時記 ピークを迎える 黄砂と花粉症の季節	26
●見直そう生活費、これがきっかけ 暮らしの中の移動費用 賢く節約しませんか?	28
●まんが わたしはダマサレナイ!! 今までと違う! 新手的未公開株取引詐欺	30
●おたよりコーナー	33
●都道府県金融広報委員会一覧	34
●知るぼるとライブラリー	35
●まんが「おかのね」	36

描き続けたい
人間の生きる姿

巻頭インタビュー

森田芳光

映画監督

映画監督として

時代を捉えた作品を撮り続け、

世に送り出している森田芳光さん。

特に昨年末公開された

『武士の家計簿』は、

多くの話題を集めました。

そんな森田さんにご自身のお金観や

たくましく生きるヒントを伺いました。



©2010「武士の家計簿」製作委員会

●森田芳光（もりた・よしみつ）

1950年東京生まれ。映画監督。日本大学芸術学部放送学科在学中から8ミリ映画を撮り続け81年劇場用映画デビュー。83年『家族ゲーム』で数々の映画賞を受賞し脚光を浴びる。シリアスなドラマから喜劇、恋愛、ホラー、ミステリと幅広いテーマと話題作を数多く発表し続ける。最新作『僕達急行-A列車で行こう-』が来春公開予定。

逆境の中でも前向きに生きる人を描いた『武士の家計簿』

取材先に現れた森田芳光さん。実力的にも年齢的にも巨匠と呼ばれてもおかしくないポジションにありながら、ひたむきに良質の作品を探求し続ける映画青年がそこにいた。

そんな森田さんの最新作が『武士の家計簿』だ。

この映画の舞台は幕末の金沢。加賀藩に代々御算用者（現代の経理担当）として仕える猪山家の八代目の直之とその家族たちの生きざまがこの映画に描かれている。

主人公の直之は借金体質の猪山家の財政再建に取り組みながら、刀ではなく、そろばんを武士の魂にして一途に生きる“そろばん侍”。そんな直之の主張で猪山家はそれまでの生活を見直し、高価な着物や調度品なども売却し、質素倹約に努めていく。

洪々と直之に同意する両親。直之の理解者として献身的に支えていく妻お駒。直之からそろばんと家計簿のつけ方を叩き込まれ反発しながらも成長していく長男の直吉の姿などが描かれている。

「この映画で特にこだわったのは、人は貧しさに對してどう対処していくか、です。膨大な借金を抱える猪山家。そこで私が撮ろうとしたのは、逆境の中でも明るく前向きに生きようとする人間の姿でした」と森田さんは語る。

自分にしかできない仕事

この『武士の家計簿』だけではなく、森田さんはさまざまな作品の中で人間が生きる姿を独自の視点から捉えてきたと話す。人がしっかりとそこにいる。それは完成した作品だけではなく、映画づくりのプロセスにおいても同じだと言う。

「たくさんのスタッフや俳優などのメンバーがいて初めて映画づくりができます。ですから映画監督の役割は、人を上手にコントロールすること。ある意味、サッカーや野球といったチームスポーツの監督とよく似ていると思います。選手にある程度自由なプレーを求めると、タイプと、細かく注文をつけるタイプがあるように、映画監督にも2つのタイプがあると思います」と話す森田さん。自分自身は後者のタイプだと位置づける。森田さんは、克蘭クイン前からその映画の役に最もふさわしい俳優を選ぶことはもちろん、スタッフもその人にしかできない役割や個性を発揮させるための確かな指示を与えている。

その人だけができる仕事がある。森田さんはその信念を、自分自身にもあてはめている。プロデューサーから監督の依頼があったときに、森田さんがその仕事を引き受けるか否かの判断基準は、自分にしか撮れないかどうかだ。“自分だから作れる映像がある”そう直感できたときに森田さんは、監督を引き受ける。その瞬間から、森田さんの映画づくりが始まっている。

監督をしながら学んだ 映画の撮影技術

森田さんは子どもときからよく父親に映画へ連れて行ってもらった。その中で自然と映画が好きになっていった。人気の映画はすぐに満席状態で立ち見になる。森田さんは、子どもながらこれだけたくさんの人を集められる映画の大きな力を知った。

そしていつの日からか森田さんは映画を含む放送関係の仕事を夢みるようになる。大学は日大芸術学部の放送学科に進んだ。しかし当時は大学紛争が最も激しかった時代。大学はロックアウトされ、放送関係の知識やノウハウはほとんど学ぶことができなかった。時間をもて余してしまった森田さんはやがて意外な行動に出る。

「大学がそういう状態なら、自分で何か勉強していくしかないと思ったのです。そこで始めたのが8ミリカメラを回して自主映画を撮ることでした。脚本も自分で書き、もちろん撮影も監督も一人でやりました。撮影の技術や演出方法なども誰かに教えてもらったわけではありません。全部独学で学んできました」

森田さんの自主映画の創作活動は大学卒業後も続く。そしてその作品の一つである『ライプイン茅ヶ崎』を自主映画祭に出品し、脚光を浴びる。

このチャンス逃さず森田さんは劇場映画第一作『の・ようなもの』を手掛ける。助監督という下積み

森田芳光

インタビュー



経験していない森田さんに劇場用映画を撮る35ミリフィルムのノウハウは無かった。しかし、現場のベテランスタッフに支えられながら、実践の中で学んでいく。

「35ミリのカメラだからできる撮り方などをこのときのスタッフが親切に教えてくれたのです。何も知らないのに映画を仕切る。そんな私は経験豊かな撮影ス

タッフの人から見れば宇宙からきたエイリアンのように、不思議な監督に見えていたことでしょうね」と森田さんは当時を懐かしく振り返る。

そしてこの作品が、ヨコハマ映画祭で作品賞と新人監督賞を受賞。映画界に森田芳光監督の名があつたという間に広がっていく。この『の・ようなもの』以降、森

田さんは、映画監督としての道を歩んでいく。

自分をプレゼンテーションすることの 大切さ

森田さんのお金の使い方についてのモットーは、この『のようなもの』の製作に凝縮されている。

「お金を何にどう使うか、それを聞かれたら素直にいい映画を撮るために使うと答えるでしょうね。いい映画のために資料を買ったり、勉強したり、それ以外のお金の使い方にはほとんど関心はありません」

森田さんの劇場映画デビューとなった『のようなもの』は誰かから依頼された作品ではなかった。自分から企画し、映画界に働きかけることで世に送り出すことができた作品だ。

映画づくりにかかる費用は莫大だ。そこで森田さんは両親を説得し、なんと実家を担保に3000万円を銀行などから工面したと言う。そんな森田さんが、超氷河期と言われ、就職活動で苦戦を強いられている今の若者たちに励ましのメッセージを贈ってくれた。

「確かに大学生を中心にして雇用状況は厳しいと思います。しかし、今の若者たちは子どものころからインターネットが普及し、簡単に情報を手入したり、発信できる素晴らしい環境とスキルを持っています。

このITを駆使した武器をもっと活用できるのではないのでしょうか？自分をプレゼンテーションできるチャンスは、目の前にいっぱいあるはずです。たとえば私のように映画界にデビューしたいなら、自分の作った映像

をネットで簡単に全世界に発信できるわけです。

また自分が興味ある仕事もネットを通してなら、きめ細かく調べていくこともできるでしょう。自分に合った仕事を手にするチャンスはきつとあると思います。就職難という困難に逃げないで前向きな気持ちで取り組んでいってほしいですね」

そう話す森田さんの語り口は物静かだ。しかし自主映画を発表し、さらにお金も自ら工面しながら映画界にプレゼンテーションし、成功を収めて来た森田さんのその言葉には力強い説得力がある。

時代に不足していることをキャッチ それが時代をつかむ映画になる

自分で道を拓き、自分でしか作れない映画を撮り続けてきた森田さんには、一つの悩みがある。それは映画監督として自身に確固たるジャンルがないことだ。

「たとえば戦争ものならこの人。人情あふれるドラマならあの人といったように一つの得意ジャンルを持っている映画監督がいます。そういった場合は、ある程度ファンが定着しやすく、映画が当たるか当たらないかも読みやすくなってくると思うのです。

しかし私の場合はありません。というよりも持てないのです。なぜなら自分の撮りたいものは、一つの路線にまとまってくれないからです」

と森田さんは自分自身を分析する。
確かに森田さんの作品は、青春ドラマ、ホラー、純文

学とすべて路線が違う。またすでに撮り終え、来春に公開予定の次回作も『武士の家計簿』の世界とはまったく違う。

それでも森田さんの映画において全作品に貫かれている何かがある。それは、その時代に流れている空気を捉えていることだ。

そのために森田さんは、どの映画でも必ず一つの手法を取り入れている。それは映画を作る前にその映画の“色”を決めるということ。森田さんの言う“色”とは、映画のテーマに相当する。どんな“色”にするか、それを決めた上でさまざまな撮影プランを絞り込んでいく。時代を的確につかむと評価が高い森田作品の鍵になっているものは、この色選びだ。

ではその色は、どうやって決めるのだろうか。

「私は映画の色を考えるとときに、今、この時代に不足しているものは何かを考えます。今回の『武士の家計簿』では不況が続く日本の中で見失われがちな人の気高さや力強さでした。監督の依頼があり、プロデューサーから話を聞いた中でどんな色にするかは決まります。後は最後までその方針がぶれないよう、脚本から役者さんの細かい演技指導、照明や音楽などさまざまな仕事を積み重ねていきます。こうした作業をすべて最初に考えた映画の色に沿って組み立てていくようにしています」と森田さん。

描かれている世界は作品によって違う。しかし森田さんの映画には懸命に生きようとするとする人間とその色が、独特の目線で描かれている。